

百済仏教の始原と展開

—— 漢城・熊津期仏教の再検討 ——

金 寶 賢

はじめに

百済の政治・文化は都がおかれた時期と地域にしたがい、漢城時代（475まで）、熊津時代（475～538）、泗沘時代（538～660）の3期に区分して考えるのが一般である。中でも百済の仏教は、記録によると漢城期にあたる4世紀末の枕流王代に初伝が見られ、公伝当初から寺院建立や僧団組織がなされるほど王室主導による仏教受容が指摘されている。ところが初伝に続く漢城期仏教を記す史料があまり見られず、これまで確認された資料も当時の詳細を説明するには貧弱であるのが現状である。

一方、高句麗の南進によって急遽、熊津（現公州）への遷都を強いられた百済にとって熊津時代は、外敵からの脅威はもちろん、王室の復元と内政の不安を解消しながら国家再建を図ろうとした時期であった。今日、複数の史料から見られる当時の百済と中国・日本との積極的外交は、その一環であったとされる。それは仏教文化の面においてもあらわれており、普段、百済仏教の特徴の一つとされる南朝系の影響が本格化するの、この時代からである。特に古代東アジアの主な文化系統として広く知られている南朝-百済-飛鳥・白鳳の構図は、まさに当時の仏教を媒介とする外交慣行によって築き上げられた結果であると言える。このように熊津時代の仏教は前代の漢城期に比べると史資料ともに増え、その実態がより鮮明になってくることは確かである。しかし、当時の仏教様相を決定づける考古学的成果はまだ確認されておらず、それ故に今日までいくつか関連研究がなされているにも関わらず、百済仏教に対する断片的な

理解にとどまり、少なくない疑問と問題をそのまま露呈している点においては漢城期仏教の事情とあまり変わらないのが率直な感想である。そこで今回の研究では、これまで確認された百済の漢城・熊津期仏教に関する史資料を改めて整理・分析するとともに主な先行研究に対する再検討を加え、百済初期仏教の始まりと発展過程を百済仏教史の連続性のうえで理解することを試みた。

1. 百済の仏教受容

1) 漢城期仏教に対する諸論

①漢城期の仏教公伝

現在、百済の仏教公伝に関しては『三国史記』、『三国遺事』、『海東高僧伝』などの文献内容に沿って、「枕流王元年（384）9月、東晋から来た摩羅難陀によって伝えられた」とする認識が一般である。また、この請来に先立つ同年7月には百済から東晋へ朝貢した記事が見えることに関連づけ、摩羅難陀の来百が百済使者らの帰国に同行していた可能性も提起されている。一方、摩羅難陀の百済入りに際し「王自らが迎え入れ、翌年に寺を建て僧10人と住ませた」と⁽¹⁾とされることから、百済には公伝以前から私伝の形で広まっていた仏教が存在し、枕流王の頃にはすでに王室にまで信仰されていたことや、摩羅難陀の訪問は国王自らが出向かいするほど国家使節としての性格を呈すると同時に、国家的請来の意味を持っていたとも推論されている（金煥泰1985）。

枕流王元年の仏教受容をめぐることは、後の聖王代に至るまで約150年の間、関連記事が見られないことや考古資料の希薄などから、4世紀末の伝来時期を疑問視する声も根強い。その先駆となる例として『日本書紀』推古条に登場する百済僧観勒の上表文を主な根拠に、百済の仏教受容年代を5・6世紀頃であると説明する末松（1954）と田村（1978）の論があげられる。両氏の説を紹介すると、百済仏教公伝の5・6世紀説を最初に提言した末松氏は、上表文の中で「乃傳之至於百済国、而僅一百年矣」につづく「未滿百歳」の意味を次の二道に解釈できるとした。まず、㉞「（仏教が西国より漢に伝えられ300年経て）百済に伝わってから僅か百年であり、（欽明の公伝（552）から、現在まで）まだ百年に満たない」と読めば百済の公伝は452年となる。次に、㉟「（仏教が西

国より漢に伝えられ300年経て）百済に伝わってから（現在まで）僅か百年であり、（欽明の公伝からも）まだ百年に満たない」と解すれば百済の公伝は524年になる。さらに、これを受けた田村氏は百済の仏教受容を、中国や韓国、日本の諸史料から関連記事が頻繁に現れる聖王代の6世紀初に求めている。

しかし、末松の提言にはいくつかの問題が指摘できる。まず、日本の仏教公伝に関して両氏は『日本書紀』に記す欽明13年（552）をそのまま採用しているが、現在は『元興寺伽藍縁起兼流記』『上宮聖徳法王帝説』を基にした538年が最も有力視され、この年に日本の仏教公伝を求めるのが一般である。また中国への仏教伝来に対しても、⑦の場合は後漢代の152年となり、④ならば漢王朝滅亡後の三国分立期に該当する224年になってしまい、両方ともすでに中国入りしていた訳経僧らによって漢訳仏典が普及していた時代にあたる（趙景徹2010）。中国の仏教伝来に関してはいくつかの説があるが、現在は広く知られている紀元67年説と学界で認められている紀元前2年説が有力とされる（鎌田2001）。次に、百済初期の仏教に関する記録は『三国史記』枕流王条以外にも、阿莘王代の「下教崇信仏法求福」⁽³⁾記事や『弥勒仏光史跡』の謙益⁽⁴⁾関連記事などを通して、枕流王代の公伝を継ぐ百済仏教の存在が認められる。また近年の研究（趙景徹2002）によると、観勒の上表文は仏教の受容を明らかにするものではなく、日本に僧律をたてることを目的に書かれた文書であり、その上『書紀』に載せられた上表文は、当初の全文ではなく後代の添削が加わったものであることから、この記事を頼りに中国・百済・日本の仏教伝来を推定することは無理があると論じている。

②近年の研究と諸問題

漢城期の仏教に関しては公伝時期の問題以外にも、百済における仏教受容の背景と当為性を百済内部の政治情勢から求める研究などを通じて、劣弱な史料情報を補うことに役立てようとしている。本来この類の研究は『三国史記』や『日本書紀』などの史書に対して史料批判を行わず、そのまま事実として認めていたそれまでの百済政治史研究の傾向に対する問題提議から始まった。当初は国家形成に伴う支配思想の変化を考察する政治史的性格が強かったが、「高句麗・百済への仏教伝来は中国からの下賜によるもの」とみる田村圓澄の

論（1978）を批判した李期白の研究（1999）以来、百済の仏教・文化史にも政治情勢からの理解がより一般に用いられるようになった。特に氏の研究は、仏教伝来を受ける側の妥当性から説明しようとする姿勢に広い共感が得られた。近年の主な研究を紹介すると次のようである。

まず、百済の漢城期に繰り広げられた支配勢力間の対立関係に注目した趙景徹の研究（2002）によると、百済の仏教受容の努力は枕流王以前一少なくとも近肖古王期からあったとしている。その根拠として氏は近肖古王代に見える一連の東晋への朝貢記事⁽⁵⁾をあげ、この遣使が高句麗小獸林王2年の仏教受容に刺激され、晋から仏教請来を試みたものであったが、結果的には貴族らの反対によって失敗に終わったと説明した。また百済の仏教公伝が遅れた理由は、近肖古王代に至るまで続いていた肖古王系と古爾王系との王位継承争いに加え、王后を立て政治的影響力を強めようとする外戚貴族間の対立などが原因であると述べた。さらに、王室貴族間の対立が公伝以降もつづいたせいで、漢城期における仏教の普及は目立つ進展をみられなかったと結論づけている。次に、吉基泰（2012）は研究のなかで、枕流王以前の百済が仏教の受容に積極的ではなかった理由として、国家形成期であった3～4世紀の百済にすでに楽浪を経由して流入されていた儒教と道教が支配理念に定着していたことを指摘している。そして漢城時代に見える儒教と道教の痕跡として『三国史記』に記された「古尔王27年（260）の官位16品の制定」、「近肖古王24年（369）の閱兵に道教的意味の色旗が使用」、「雉壤城戦闘（369）をめぐる太子（後の近仇首王）と將軍莫古解のやり取り中『道德經』の引用が見られる」⁽⁶⁾などを例にあげた。さらに、枕流王元年に行われた仏教公伝の背景に関しては、近肖古王から近仇首王まで続けられた高句麗との頻繁な戦争によって弱体化した王権と、それを機に激しくなる貴族の反発を打開しようと新たな政治思想を求めた結果であると論じている。

以上、百済の仏教公伝とその背景をめぐるいくつかの説を検討してみたが、これらの研究に見られる文化の受容を受ける側の諸事情に注目する姿勢は、研究方法として一定の理解と今後の研究への配慮がなされるべきであろう。しかし、両方とも根拠史料に『三国史記』の比重が大きく、その史書がもつ問題点⁽⁷⁾

をそのまま露呈している限界も感じられる。故に、各々の論が根拠としている文献の信頼性を含む現段階の史料だけでは、漢城期仏教に対する難点が依然として存在すると同時に、これらの研究に拠り百済仏教の始まりを一律に断言するには無理があることも確かである。ただ仏教公伝に関しては、現在、最も通用されていることに加え、近年の研究に首肯できる点も少なくないことから、一旦は4世紀公伝を認めつつ、その検証にも気を配りながら百済仏教の始原を究明する論を進めたいと思うのである。

2) 国家体制の整備と仏教

①六朝仏教とのかかわり

百済に仏教が伝わった4、5世紀頃、中国は六朝時代の真最中で東晋や五胡十六国から南北朝に至るまで多くの王朝が興亡を繰り返していた。反面、中国仏教史における六朝時代は、その後続く唐時代と共に中国大陸で仏教文化が最も隆盛した時代で、インド・西域から積極的に仏教を受け入れ中国の文化に融合・定着させた時期として評価される。六朝時代の仏教界には、晋代の竺法護や仏図澄、後秦の鳩摩羅什、東晋代の慧遠と法顕など著名な訳経僧や求法僧を輩出し、彼らの活躍により漢訳經典も充実していた。また大規模な造寺・造塔も数多く行われ、現存する遺跡としては、東晋時代に着工が始まる敦煌の莫高窟（4世紀中）を筆頭に、北魏代には雲崗石窟（5世紀中）や竜門石窟（5世紀末）の他、近年の考古学的成果としては北魏代の都であった洛陽から確認された永寧寺址などがこの時代に栄えた仏事の痕跡を今日に伝えている。さらに当時の様子は、北魏末の『洛陽伽藍記』、梁代の『高僧伝』、唐代の『法苑珠林』などの仏典を通して窺うことができる。

百済と仏教が盛んであった中国との交流は、馬韓の時代から始まっている。中国の史書『晋書』には3世紀中期から後半にかけ馬韓の使者が晋に遣わされた記事が多く見られ、当然彼らは中国文化、とりわけ仏教文物に触れていた可能性が高い。すると晋から帰国した使者らによって当時の中国仏教が馬韓の諸国に知らされていたことも十分に予想される。また『晋書』を始め『梁書』『宋書』『魏書』などの史書によると、百済の漢城期にあたる4～5世紀から

は、百済が馬韓に替わって独自に使者を遣わして中国から冊封をうける記事が見られる。これらの記録は百済が晋（西晋）→東晋→宋（劉宋）につづく南朝と頻繁に交流をしていたことだけでなく、百済文化に早い時期から南朝の影響が及んでいたことを表わしている。六朝時代の中国大陸では多くの王朝が乱立しており、南北朝に入ってから各王朝間の競争が一層激しくなっていた。この時期の中国と周辺国との間でよく見られる「冊封」は、戦略的に重要である周辺諸国と官爵体系を通じて政治的一体性を強調する代わりに、諸国の要求にも応えようとするものであった（窪添2010）。すなわち、中国側は周辺国に対し権威の維持と脅威の除去が図れる反面、諸国の方は中国先進文物への要求と受容が可能になり、それを統治基盤の強化につなげようとした。その際、諸国が国家体制の変革・強化のために取り入れようとした先進文物に仏教の請来が重要な役目を果たしていた。それは、高句麗と新羅での律令制定や古代日本の「十七条憲法」など仏教公伝期と王権強化政策の密接さを伝える韓国や日本の史書からも確認することができる。

②近肖古王代の仏教認識

百済がいつから馬韓全域を併合し国家体系を整えたかに関しては諸説があるが、馬韓に属されていた漢江流域に一定の領域を保ち、それを拠点に支配圏域を拡大しつつけていたことは確かである。さらに最盛期とされる近肖古王代（位346～375）になると、高句麗との征服戦争を遂行し、一方では中国や日本との間で積極的外交を実行するほど成長していたことが複数の史料から確認できる。例えば、『晋書』太宗簡文帝条と『三国史記』近肖古王条に見える遣使記事は、近肖古王代の百済が中国に使者を送った最初の記録であると同時に、百済が中国王朝の冊封政策に編入された下限を現している。またそれは、この頃すでに百済が朝鮮半島地域の中心勢力の一つとして対外的に認められていたことを窺わせるものである。

前項で論じたように百済は、馬韓が朝貢をしていた3世紀から中国の仏教を認知していたと思われるが、馬韓に替わる勢力に成長してもすぐには仏教の請来に至らなかった。また、百済は領土拡張に励んだ古余王（位234～286）から近肖古王代に至って国家体制がほぼ完成しており、その基盤を支えたのは当然、

中国との交流による文物の受容であった（盧重国1986）。それにもかかわらず、交流の内容に仏教が含まれていないことはどう理解すべきだろうか。この問題に関しては、前の先行研究などを参考にしてみると、何より当時の百済に根付いていた祭祀儀礼の影響が指摘できるのではないかと考えられる。

百済や高句麗、新羅など朝鮮半島地域で行われた古来の祭祀は、『三国史記』を始め『三国志』、『後漢書』、『梁書』、『周書』など多くの文献に関連記述が見られる。これらの史書に紹介された半島特有の祭祀儀礼である「迎鼓」、「舞天」、「東盟」、「五月・十月祭」などは原三国時代を伝来起源とし、その思想背景に含んでいる自然神信仰、祖先崇拜、農耕儀礼などは後の三国時代にもそのまま受け継がれていた。特に、『三国史記』の「百済本記」には温祚王元年（前18）5月条に見える「立東明王廟」の記事以来、腆支王2年（406）正月条の「謁東明王廟、又祭天地於南壇、大赦」記事に至るまで10数回の祭祀記録が記されており、古代国家の統治においても古来の祭祀が重要な意味を持っていたことを裏付けている。そもそも古代の祭祀は、初期国家成立の段階には国祖崇拜などを通して政治勢力間の結束が図られ、後には国家統治の安定を目的とする祭天儀礼（自然神崇拜）にまで拡大していく。百済では、東明王廟や仇台廟などが前者にあたり、早魃などに行われた祭天祀地が後者に該当する（朴承範2004）。いずれにしろ百済に仏教伝来以前から統治手段として祭祀儀礼が用いられていたことは確かであり、このような祭祀儀礼の痕跡は、4世紀中葉を上限とする「扶安竹幕洞祭祀遺跡」⁽¹³⁾や『三国史記』の記録に一致することで⁽¹⁴⁾注目される「靈巖月出山祭祀遺跡」⁽¹⁵⁾など考古学調査からも実態が確認されている。すなわち、百済では国家体制が整備される以前から支配思想が存在しており、その始まりは原三国時代にまで遡る。また、このように長年にわたって根付いていた古来思想の存在は、百済が中国との交流において仏教の請来を遅らせる主な原因になったと類推することができるのである。

3) 考古資料に見る漢城期の仏教

① 蘆島出土金銅如来坐像（【図1】参照）

4世紀前後、漢城地域を中心にしていた百済文化の痕跡は、漢江流域から発

掘・調査された城壁や古墳など、いくつかの遺跡を通じて確認することができる。ところが、仏教に関連する考古資料はまだ数少なく、故に当時の仏教様相もさまざまな研究成果に頼らざるを得ないのが現状である。それでも、漢城期の百濟仏教の様子が窺える有力な資料の一つとして、1959年ソウル市纛島から発見された金銅如来坐像があげられる。現存する韓国最古の仏像とされるこの金銅仏は、全長5 cm程度で結跏趺坐をした禪定修行の姿を表現しており、その様式は、後趙の「建武四年銘金銅仏坐像」⁽¹⁶⁾や日本に現存する最古の中国金銅仏である大夏「勝光二年銘金銅仏坐像」⁽¹⁷⁾から見られるように4～5世紀頃の中国で流行した仏像様式に類似している（金元龍1961）。その点から纛島出土金銅仏は、発見当初には中国の仏像とみなされていた。ところが後の研究により、中国の仏像に比べ画然と小さいことや粗い衣文の表現、また鑄造過程で造像内部を空洞にする中国式に対し内部まで鑄物に埋められた胴体など、技術的未熟さが次々と指摘された結果、中国仏像を模範に半島内でつくられたものであると考えるようになった。さらに現在は、扶余新里出土の金銅仏坐像⁽¹⁸⁾や軍守里寺址出土の石造如来坐像など、後に発見・調査された後代の百濟仏像との系統も認められ、当仏像は5世紀頃に製作された百濟仏像の原形として認識されている。

②夢村土城出土蓮華文瓦

漢城時代の瓦は1925年風納土城から初めて発見された以来、これまで石村洞古墳群や夢村土城など至近遺跡から、文様のある軒丸瓦数十点を含む数多くのものが確認された。これらの遺跡群が位置するソウル市東側の漢江中流（主に現松坡区）は、長年の発掘調査により百濟漢城期の王都であることが確実視された地域である。特に1987～88年、夢村土城の発掘調査で確認された蓮華文軒丸瓦は、漢城時代の仏教を実証する大きな手がかりとして現在も調査・研究が続けられている。中でも、近年の研究である亀田修一（2006）と鄭治泳（2010）の研究は注目に値すると思われる。その内容を参照してみると、まず夢村土城と石村洞古墳群の資料を対象に分析を行った亀田氏は、両遺物とも製作技法に楽浪瓦の影響を引き継ぐとされるこれまでの認識を確認した上、漢城期の瓦は基本的に「漢→楽浪→百濟」を継ぐ系譜を持っているが、一部編年の

新しいものからは中国北朝を受け継ぐ高句麗からの影響が見られると論じている。また、蓮華文に関しては、既成の単弁六葉蓮華文（亀田C類）に加え、学者によっては菱形文に分類される単弁蓮華文（亀田B類）も蓮華文と見なし、両瓦とも編年的に新しいものと判断した。そしてこれらは楽浪系の技法に高句麗の影響が合体したものであり、同じ系統による仏教伝来の関連性も否定できないと指摘している。

次に鄭治泳の方は、亀田が対象とした2遺跡に近年の風納土城資料も加えて検討を行い、漢城期百濟瓦の全般に関する分類を試みた。氏は、瓦の製作技法に関してはおおむね亀田と一致する見解を示したが、軒丸瓦の文様に対しては南朝の銭文との類似性をあげ東晋からの影響を説明している。また蓮華文瓦においても、文様の始原は亀田と同様、北魏にあることが認められるが、5世紀からは南朝にも北魏系の蓮華文が出現することから、漢城期蓮華文瓦の受容先は南朝であると論じた。一方、瓦の編年による遺跡の時期区分では、両氏とも風納土城は3世紀後半から、石村洞と夢村土城は4世紀後半から始まり、どちらの遺跡も5世紀中期まで続いたと判断した。また蓮華文瓦の出現は5世紀中葉である漢城期後半と分析している。これまで古代朝鮮半島地域における瓦の使用例に関しては、一般の建物に使われた例は確認されておらず、国家権力の象徴である都城や王宮などに優先的に使われた建築材であったことが明らかになっている。それら以外では、寺院や王陵など祭礼建物にも使用が考えられている（亀田2006、鄭治泳2010）。特に『旧唐書』の高麗（高句麗）条には「（高句麗では）山谷に住居があり、皆、屋根に茅を葺く。ただ仏寺・神廟及び王宮・官府には瓦を用いる⁽¹⁹⁾」と記されている。これは高句麗の様子を表わしているものであるが、ほぼ同時期に中国文化と接していた百濟の事情を踏まえると、文化水準の動静にはこの記事の描写と著しい違いはなかったと考えられ、故に百濟でも瓦を用いた寺院の存在が十分に類推できると言えるのである。

2. 熊津期仏教に対する資料検討

1) 熊津期仏教の痕跡（関連遺物）

①武寧王陵（【図2】参照）

1971年、公州宋山里古墳群の排水工事中に発見された武寧王陵は、磚築による玄室と羨道を持つ合葬墓で、副葬されていた墓地石の銘文によって被葬者が熊津期後半に在位した百濟25代武寧王とその王妃であることが明確にされた。また、武寧王陵出土品の中には当時の仏教的要素を含んでいる遺物も多く、主な資料は以下の例があげられる。

i 蓮華文裝飾磚

武寧王陵内の羨道と玄室に用いられていた当磚に関しては、製作技法や使用位置によるいくつかの分類⁽²⁰⁾がなされているが、蓮華文だけに注目してみると「1個の磚に六葉の蓮華文が2つ施されているもの」と「2個の磚を1式として八葉の蓮華文が施されているもの」に分けられる。中でも八葉蓮華文磚の場合、扶余井洞里瓦窯址から同一関係とされる磚が確認されたことに加え、軍守里寺址出土の箱形磚とも蓮華文の類似性が認められている。これらの事実は、熊津後期に広まっていた王室仏教の存在を示すことは勿論、後の遷都場所となる扶余地域への経営とも関連付けられるものとして興味深い資料である。

ii 宝珠形壁龕

当壁龕は灯臺をおくための灯龕で、周縁を宝珠形に飾りその輪郭にそって火焰文を描写している。宝珠形壁龕は玄室の北側に1個、東と西壁にそれぞれ2個ずつ設けられていた。この壁龕はその形がもつ仏教的要素だけでなく、このような墓室内に灯龕を設ける発想も仏教の献灯儀礼から導かれているもので（田村1978）、単なる装飾以上の意味を持っていることがわかる。

iii 金製冠飾（王と王妃）

文様と大きさを若干異にした王と王妃のものがそれぞれ2つ1双で、両方とも全体を透彫りによる火焰文と忍冬唐草文で表現している。王の冠飾は中心部に八葉蓮華文を、王妃の方は七葉蓮華文を置き、各下には台座が配置さ

れていた。このような蓮華文は、平壤清巖里土城から発掘した金銅冠や羅州新村里出土の金銅冠飾との類似性が指摘されるが、その様式は中国河南省鄧県南朝墓の壁磚に近似しており六朝仏教美術から受け入れている可能性が高い（嚴基杓2010）。

iv 王妃の木枕

武寧王陵では王と王妃の棺から、それぞれ木製の頭枕と足坐が出土した。中でも王妃の頭枕には、表面を金箔の亀甲文に区画し各文様の中に蓮華化生や鳳凰、飛天などが描かれていた。このような図像は以前から北魏竜門石窟との関連が指摘されているが、本来、蓮華化生や飛天などの表現は仏教で死者の冥福と往生を願うもので、その思想は極楽浄土以前の弥勒浄土思想にまで遡ることができる。中国仏教美術においても、蓮華化生と飛天は最も一般的な素材として南北朝を問わず頻繁に用いられていた。故に、この図像は中国仏教美術の影響として捉えるべきであると考えられる。

v 銅托銀盞

青銅製の受け皿に銀製の杯と蓋が一式を成しているもので、各々に蓮華を中心とした忍冬唐草文・火焰文・雲文・龍文などが陰刻で描かれていた。特に、銀製蓋の鈕子を蓮蕾と子房であらわす技法は、後の王興寺址と弥勒寺址から発掘した舍利容器に近似していることが指摘できる。

vi 銅盞

杯と考えられる盞が5個出土し、発見当初は緑青により文様が見られなかったが、後の保存処理過程で盞の内外面から蓮茎につながった蓮華・実・蕾などの文様を陰刻に表現していることが確認された。特に内側の双魚文に対しては、南朝の器によく登場する文様であることから銅托銀盞とともに中国製作とみる意見もある（権五栄2005）。

以上に示した資料以外にも、武寧王陵からは王の簪、飾履などの装身具や青磁六耳壺などの陶磁器類を始め、数多くの出土品に仏教関連の要素が確認されている。

②蓮華文瓦（【図3】参照）

百済の瓦は熊津期に入ると、文様を含む製作技法全般にかけて漢城期との関

連が薄くなり、少なくとも瓦に限っては両時期の間に文化的断絶があったと考えられている。今日まで蓮華文瓦が確認された熊津期の主な遺跡は、都城である公山城遺跡と聖王代の建立が伝わる大通寺址の他、蓮華文の塼が用いられた武寧王陵と宋山里 6 号墳などがあげられる。これらの遺跡から出土した瓦は、一般に中房が比較的大きく蓮弁先が丸くて厚みのある「公山城式」と、間弁が鮮明で蓮弁先の珠文が特徴の「大通寺式」に分類され、前後関係は公山城式を熊津初期（熊津遷都直後から）に、大通寺式を熊津後期（6 世紀初・中期から）に想定している。

熊津期軒丸瓦の文様は、公山城や扶蘇山城のような王宮址遺構を中心に一部の巴文瓦（卍文）と素文瓦が確認されるが、出土例では蓮華文瓦の方が圧倒的に多いことから、最も一般的に使われていたとされる。それは銭文瓦が主流を占めている漢城期に比べると、仏教位相の変化を予感させる。勿論、蓮華文瓦の使用をそのまま寺院建立に結びつけることはできないだろうが、以前より増して普及した仏教文化の状況を現していることは確かである。また熊津期の蓮華文瓦がその後につづく多くの寺址出土遺物と関連を持つことも事実である。例えば大通寺式の場合、後の東南里寺址を始め、陵山理寺址、軍守里寺址など熊津末期である 6 世紀中葉から 7 世紀初の泗沘期にかけて主要寺址から確認されており、さらに古代日本の初期寺院である飛鳥寺、豊浦寺から出土した星組瓦も、大通寺式との系譜が認められている（清水 2012）。

③古墳副葬品（【図 4】【図 5】参照）

漢城後期から熊津初期に属する地方首長の古墳でも副葬品の中から仏教に関連する遺物が確認されている。主に百済境域と考えられる漢江、錦江、柴山江流域などに多く分布するこれらの古墳からは、武具や馬具の他にも各種の装身具や中国製の陶磁器などが出土され、当時の中央政権と地方との支配関係を知る上でも重要視されている。地方豪族の墓地とされる古墳副葬品の中で仏教との関連が知られる有名な遺物としては、源州法泉里 4 号墳出土の青銅蓋と、天安龍院里 C 地区石室墳から見つかった青磁蓮弁文碗⁽²¹⁾があげられる。上面に蓮弁と蓮子の立体的表現が特徴である法泉里の青銅蓋は、まだ直接に比較や想定ができる資料は見られないが、同地区の 2 号墳から発掘した羊形青磁の場合、3

世紀後半から4世紀前半までの中国南朝系墳墓からいくつかの類例が発見されており、青銅蓋も同じ系統を持つ輸入品であると考えられる。一方、外面全体に蓮弁を施している龍院里青磁碗の場合は南朝劉宋の明曇慧墓誌（474）からの出土品を始め、いくつかの比較遺物によって5世紀中葉から後半の遺物であることが想定された（門田2008）。原三国から始まる遺跡群の中で、中国輸入品が発見されるこれらの古墳は、熊津遷都を前後にして本格的に造営された横穴式石室墳で、造営は4世紀後半から5世紀中葉とされている。さらに出土品の中には4世紀中葉から後半の中国磁器も多く含まれており、中国とほぼ同時代品の搬入が明らかになった。それは仏教においても、南朝の仏教文化がそれほど時間の差を置かずにして百済の地方豪族にまで届いていたことを示わしている。

2) 熊津期寺院址の検討

現在、文献にその名が見られる百済寺院は40か所にのぼる（国立扶餘博物館2009）。その内、公州周辺に立地し熊津時代創建とされる寺址は、文献のみ確認できる興輪寺を除いて6か所である。これらの遺跡は戦前から日本人学者による調査内容が知られていたが、近年、新たな発掘調査と研究などが実施されており、その結果を踏まえて公州地域の百済寺址を以下のように検討してみた。

①大通寺址

聖王5年（527）、梁武帝のために造られたとする創建記録が伝わる大通寺⁽²³⁾は、現在まで確認できた百済寺院の中で創建縁起と時期が明確な最も古い寺院である。最初に通達寺の比定を行ったのは、戦前から公州地域を中心に仏跡調査をしていた軽部慈恩である。軽部は、現公州市班竹洞に残存していた刹干支柱と水槽の周辺から基壇の一部と「蓮華文瓦」「大通銘瓦」などの遺物を見出し、この一帯を南北に中門―塔―金堂―講堂が並ぶ大通寺址であると推定した。その後、大通寺址に対しては1999年、公州大学博物館による発掘調査が実施されたが、百済時代に関連する遺跡は確認されなかった。また残存していた刹干支柱と水槽に関しても、刹干支柱は統一新羅式で後に移動されていたことが判明し、水槽は外側の蓮華文様などが百済系である指摘があるものの、遺物自体の

類例は確認されていないのが現状である。ただし、発掘調査当時からこの一帯は市街地であったため調査範囲に制限が多く、調査が行われた地域も大通寺推定地の一部にすぎないことから、遺跡全般に対する断定が難しいことも事実である。特に周辺から出土された瓦の場合、文様や製作などに同時代である扶蘇山城遺物との類似性が認められており、今後より広い範囲を対象とする調査から寺址の確認が期待されている。

②穴寺址（舟尾寺、西穴寺、南穴寺、東（銅）穴寺）

李朝時代の地理誌である『東国輿地勝覧』（纂1481）と『公山誌』（纂1859）⁽²⁴⁾には、公州地方で百済から伝わる四つの穴寺（窟寺）に関する記録が見られる。戦前に百済遺跡の調査を行っていた軽部慈恩は、文献記録と調査結果をまとめ、「公州付近における百済仏寺は立地と伽藍配置によって2種類があり、一つは大通寺に見える南朝式の七堂伽藍をする平地伽藍（百済様式）と、次に自然の洞窟や断崖を利用した北朝式の山林伽藍（山岳寺院）で、その例に西穴寺、南穴寺、銅穴寺、舟尾寺がある」（軽部1946）と述べている。軽部の調査以来、公州地域の四穴寺は百済熊津期の仏教が窺える寺址として注目され、彼の意見も当分の間は通説として受け入れられた。しかし、近年それぞれの寺址に対する発掘や地表調査が実施され、その結果、舟尾寺、西穴寺、南穴寺では出土遺物や建物址の上限が統一新羅時代を越えないことがわかり、東穴寺の場合は高麗時代に比定された建物址が遺跡の上限であると判明した。

③その他の寺址（興輪寺、水源寺）

興輪寺は、武寧王から聖王代に活躍したとされる百済の高僧謙益にまつわる王室寺院で、複数の文献にその寺名が見えることから武寧王末か、少なくとも聖王初期には熊津都城内に実在していたとみられていた（金煥泰1985）。しかし、現在、興輪寺は文献にのみ確認できる上、その創建年と位置に関しては史料の間にも誤差が生じていることが明らかになり、寺院の究明に少なくない問題を含んでいる。一方、『三国遺事』『弥勒仙花末尸郎眞慈師』条の中に寺名が登場する水源寺の場合、現公州市月城山西麓に構えており周辺には百済の羅城や窯址などが分布していることから百済寺址が有力視されていた。当寺址に対しては1967年に石塔址の調査が行われ、1989年と91年には寺址全域に対する発

掘調査が実施された。調査の結果、金堂を中心とする東向きの特徴的な伽藍配置が確認され、また石仏や青銅製鈴など遺物の発見もあったものの、出土遺物の上限が統一新羅時代を越えないことが明らかになった。

3) 百済平地伽藍の分析（扶餘地域の寺址）

前節で調べてみたように公州地域から熊津期の寺院址に関する明確な比定が困難である現状を受け、百済における平地伽藍の研究対象は、その発祥を含む特徴を扶餘地域にまで広げて考える必要があると思われる。扶餘は熊津に次ぐ泗沘時代の都であり、これまで多くの百済寺址が確認され、百済仏教が最も繁栄した時期の痕跡を豊富に残している。この節ではその中から考古学調査により実体が明確になった主な寺院址を取り上げ、百済寺址の特質と変化様相を分析し、さらに前代である熊津期との関連に対しても考えてみた。

① 主な寺址概要

i 龍井里寺址

早い時期から蓮華文瓦など百済関連遺物の発見により百済寺址であることが知られた龍井里寺址は、百済時代の羅城である青馬山城西門から約200m離れた所に位置する。寺址に対する本格的調査は1991～92年に国立扶餘文化財研究所によって行われた。この地域は発掘当初から私有地が多く含まれ遺構の毀損も激しかったことなどから、寺址全域に対する調査は困難であったが、確認された金堂址と木塔址を中心におおよその伽藍配置と寺域が把握された。特に、出土した蓮華文瓦の中には、百済初期の漢城期と見られるものや高句麗系の瓦なども含まれており、この寺院の創建年と性格をめぐる様々な議論は現在も続いている。また金堂址からは高麗期と見られる再建跡も確認され、長年にわたり寺院が存続していたことも推定されている。

ii 東南里寺址

1938年、石田茂作によって初めて調査された東南里寺址は、1993年に忠南大学博物館が再調査を実施した。調査の結果、一般的な百済式伽藍（一塔一金堂式）とは異なる無塔式の特徴的な伽藍配置が確認された。最初に調査を行った石田によると、東南里寺址の伽藍はそれまでの百済寺院では見られな

い無塔式ではあるものの、講堂の左右には鐘楼・経蔵と推測される付属建物址が見られることは軍守里寺址と類似していると述べている。⁽²⁵⁾ 東南里寺院の性格に関しては諸論があるが、中でも伽藍の特徴から中国北魏代に広まっていた捨宅寺院と考える説が有力である。⁽²⁶⁾

iii 軍守里寺址

周辺に宮南池や花枝山遺跡など離宮関連遺構と隣接している軍守里寺址は1935～36年、石田茂作と斉藤忠によって初めて調査された。百済寺址に対する最初の学術的発掘調査であった軍守里寺址の発掘では、調査を通じて一塔一金堂式の百済式伽藍構造が明らかになり、伽藍配置や基壇造成に関して四天王寺や山田寺など多くの古代日本の寺院との関連性が指摘された。また、木塔の下から確認された地下式心礎と舍利荘厳具などは、後代の陵山里寺との前後関係を明確にする貴重な資料となっている。寺院の立地に関しては、当初は南に旺浦川を置く独立伽藍として創められたが、後に離宮内の寺院に含まれたと考えられている。

iv 陵山里寺址

西に扶餘羅城（東羅城）と東に陵山里古墳群を置き、その間に立地する陵山里寺址は、1992年から2007年まで10次に渡る考古調査が行われ遺跡の全容が明らかになりつつある。調査の結果、一塔一金堂式の典型的百済伽藍を有しているものの、回廊からは工房と推定される特徴的な建物址が確認され、なかから「金銅大香炉」が出土した。また木塔址からは創建縁起を記した「昌王銘石造舍利龕」が発見され、この寺院が父王である聖王の追善を目的とする王室祈願寺であることが想定された。その他にも陵山里寺址に関しては、特徴的な立地や舍利埋納法など様々な方面からの研究が現在も続いている。

v 王興寺址

『三国史記』などに関連記事⁽²⁷⁾が見られる王興寺址は、2000年から国立扶餘文化財研究所による発掘調査が始められ、現在も続いている。これまでの調査によると、一塔一金堂の百済式伽藍が確認され、特に2007年に木塔址から出土した舍利容器の銘文は、この寺が陵山里寺に次ぐ威徳王代の王室祈願寺

であることを明らかにした。王興寺は、陵山里寺とともに創建年代が考古資料によって明確にされた寺院で、当時の寺院造営の特徴と変化を知る上で貴重な遺跡である。中でも各堂塔の構造や舍利荘厳の詳細などは、当時の百済の仏教事情だけでなく古代日本の仏教、とりわけ飛鳥寺との影響関係などに密接していることから大きな注目を集めた。近年は寺域東側の瓦窯址を中心に調査が進められ、新たな成果が期待されている。

vi 定林寺址

現扶餘市街の中心地に位置し、百済泗沘期の代表的な王室寺院とされる定林寺址は1942年、藤澤一夫によって初めて調査され一塔一金堂式の百済伽藍であることが明らかになった。その後1979～84年まで忠南大学博物館による再調査が行われ、中門、金堂、講堂などの各堂塔と寺域の規模が明確にされた。また発掘調査の際に出土した「滑石浮彫三尊仏」を始め90点あまりの陶俑⁽²⁸⁾（塑像）は、中国北魏の洛陽永寧寺出土品との類似性が指摘され、当時の隆盛した仏教様相はもちろん対外交流にまで窺わせている。一方、現存する五重石塔に関しては、弥勒寺址石塔に先行する木塔様式であることから百済石塔の始原と見ることに一致しているが、塔の基壇から確認された版築層を根拠に、石塔に先立つ木塔の建立や寺院の創建年を6世紀前半までに遡れるとする異見もある。

vii 扶蘇山寺址

扶蘇山城内の西南麓に立地する扶蘇山寺址は、百済泗沘期に比定される唯一の山中伽藍である。扶蘇山寺址に対する最初の調査は1942年、米田美代治と藤澤一夫によって実施されたが、報告書など調査記録の刊行が行われなかったこともあり、遺跡の詳細を知ることはできなかった。その後1978年と1980年に国立扶餘博物館を中心とする正式な発掘調査が実施され、結果、回廊に囲まれた中門、木塔、金堂の百済式伽藍が確認された。特に講堂がないことや、王宮址である官北里遺跡に隣接していることから王室による私的祈願寺と考えられる。また蓮華文瓦など出土遺物の編年により7世紀前半から中葉にかけて繁栄していたことが推定されている。

② 立地と伽藍配置（〈表1〉参照）

扶餘地域で発掘調査された百濟寺院の地理的な特徴を見ると、泗沘都城の中心部に構える定林寺から、陵山里古墳群の隣に立地する陵山里寺、王宮付近の扶蘇山城内に位置する扶蘇山寺まで多様な立地条件を有していることがわかる。それは当然、各々の寺院における創建目的や役目が異なっていたことを推測させる。特に熊津期に近い6世紀初から中頃に建立が知られる寺院に注目してみると、創建年が最も古いとされる龍井里寺の場合は当時の軍事防御線上にあたる青馬山城付近に位置しており、都心部から相当な距離を離れていることがわかる。それは都城内の平野部に構える東南里寺や、花枝山離宮との関連が指摘される軍守里寺などの位置に比べると、その立地上の違いが際立っている。このような龍井里寺の立地は調査当初から注目され、その創建目的をめぐりさまざまな見解が出されたが、まだ結論には達していない。それでも、当時の百濟では目的により異なる立地選定が行われていたことと、その反面、各寺院とも共通して伽藍を成す堂塔が備わるような一定の面積を保つ平坦地に造営されている点は、百濟寺院立地の大きな特徴であると言える。

一方、伽藍配置のほうは東南里寺址のように無塔式の例もあるが、伽藍内の堂塔の配置においては全般的に南北中軸線上に中門-木塔-金堂-講堂が並んでおり、このような南向きの一塔一金銅式（四天王寺式）伽藍が当時の一般的な寺院形式であったことを理解させる。中でも軍守里寺址の場合、塔と金堂を中心にして中門と講堂までの距離が一致し、古代日本の四天王寺とも近似することから、両寺院の関連はもちろん百濟の一塔一金堂式伽藍の日本伝来として調査当初から注目されていた。⁽²⁹⁾ そもそも、このように伽藍の中心に巨大な木塔を配し、その周囲を回廊で囲む一塔一金堂式の伽藍配置は、中国の河南省洛陽故城から確認された北魏永寧寺址などで見られるように、王室仏教を象徴するものとして南朝より北朝を中心に広まっていた。ただ、百濟の「一塔一金堂式」寺院の特徴を一律に北魏の影響として捉えることは、今のところ、無理であると思われる。それでも仏塔中心の寺院に対して、転輪聖王思想を背景とする王室仏教との関連性は十分に指摘できるのである。

③基壇造成の特徴（〈表1〉基壇構造参照）

基壇造成に関しては、まず基壇の築造において掘塹版築が多く見られること

から、それが百済で造寺の際に用いられた一般的な版築法であったことがわかる。ただし、旺浦川周辺の低湿地に立地する軍守里寺や白馬江（白村江）の辺に建立された王興寺のように地理条件によっては盛土版築なども使われていた。古く中国から始まった版築法は、荷重の大きい建築にも耐えられる利点から大規模な土木工事によく用いられた工法である。とりわけ、古代東アジア地域では王宮や寺院など瓦葺の大型建物から使用例が多く確認されている。それを踏まえて考えると、百済寺址の全般にかけて版築技法が使われていることは、当時の寺院造営には重い瓦葺の屋根を有する堂塔が一般であり、さらに、そのような莫大な財力と権力が必要である大掛りな土木工事を無事に遂行するには、やはり王室が造寺発願の中心にあったことを理解させる。

次に基壇の外装に対して調べてみると、普段、百済寺院における基壇外装は石材と瓦（塼）が主流であったと考えられる。特に瓦積基壇に関しては、軍守里寺址で古代日本の山田寺との関連性が認められた木塔址の塼積基壇を始め、金堂址から確認された合掌式瓦積基壇は崇福寺金堂と近似することが発見当初から注目されていた。以来、瓦積基壇は百済建築における基壇外装の主な特徴として取り上げられている。瓦積基壇は、当時の高句麗や新羅では見られない百済の独自の技法であることは確かで、そのような瓦と塼の利用は、熊津期の都城とされる公山城内の臨流閣址から確認された塼土泥築基壇や武寧王陵の造営に見るように、製作を含む高度な築造技術がすでに熊津時代から保持されていた。つまり、泗沘地域で見られる瓦積基壇は百済独自の基壇造成法であることだけでなく、その技法の始まりが熊津時代に見られることから熊津期の建築技法が泗沘地域へ移転していることとして注目すべきである。

一方、瓦（塼）積基壇が用いられた軍守里寺址、陵山里寺址、王興寺址、定林寺址で、その事例を詳しくみると、全堂塔から確認される軍守里寺を除いては、瓦積基壇の使用は講堂や回廊、付属建物址など伽藍の周辺施設に限られていることがわかる。またこれらの寺院の木塔と金堂には基壇外装に石材が用いられていた。さらにその様相は、益山地域で調査された百済末の王室寺院である帝釈寺址や弥勒寺址から瓦積基壇が見えなくなることを踏まえるとより鮮明になる。基壇部材として瓦は、石材に比べ短時間内に大量で同一のものが作れ

る利点がある反面、強度や建物荘厳などの面では石材より劣る短所も持っている。すると泗沘地域の寺院に見られる瓦（埴）積基壇の傾向は、建築工程における利便性から一時的に利用されたものの、寺院の中核を成す堂塔の荘厳には適せず次第に用いられなくなったと推察することができるのである。

3. 熊津時代の仏教

1) 政治情勢

熊津時代は、高句麗の侵略で漢城から都を遷した文周王代（475）に始まり聖王による泗沘遷都（538）直前までの期間を指す。この時期は63年という短い期間であったにもかかわらず、5人の王が入れ替わり、その内、熊津前期にあたる文周王、三斤王、東城王代には、3人の王とも貴族勢力との対立の末に暗殺されてしまうほど遷都後の混乱が続いていた。『三国史記』によると、百済は文周王2年（476）の熊津遷都直後から不安定な政治情勢を打開すべく何度も中国との交流を図るが、海路を断った高句麗の妨害により失敗した。結局、百済が中国南朝との外交を再開したのは後の東城王8年（486）になってからである。それ以降、百済の対中外交は全方位的に広がり、時には南朝にとどまらず北朝とも外交努力につとめていた。一方、『日本書紀』雄略条には、高句麗の百済侵略による熊津遷都の経緯（20年条）をはじめ、東城王の王位継承に際しては大和政権から護衛を送ったとする記事（23年4月条）なども見える。さらに中国の史書である『宗書』⁽³¹⁾には、同時期に宋の力を借りて高句麗を討とうとする倭王武の上表文も記されている。これらの史料は、当時の百済と日本との緊密さだけでなく、高句麗の南進に対する両地域の危機感も読み取れる。その上、東アジア地域を取り巻く緊張と協力関係がすでに熊津時代から始まっていることを窺わせるものである。

6世紀に入ると中国の南朝は南斉から梁に替わり、朝鮮半島の高句麗でもこれまで南進政策を進めてきた長寿王代が終わる。このような国際情勢の変化の中で王位に継いだ武寧王は、梁との外交努力に努め冊封を受けると同時に南朝の先進文物を積極的に取り入れた。公州地域に現存する南朝様式の埴築墳である武寧王陵と宋山里6号墳は当時を代表する遺跡で、中でも宋山里6号墳出土

の「梁官瓦為師矣」銘磚は、熊津後期の百済文化に梁の南朝文化が深くかかわっていたことを示す重要な資料である。内政の面では中国に倣い「六佐平」や「十六官等」など官位・身分制が実施され、前代の東城王代から進められた王権強化がようやく安定するようになった。続く聖王代には蟾津江流域（現全羅道南東部）の伽耶地域を合併する内容が『日本書紀』の「任那四県割讓記事」に見られ、疆域強化にも力を注いでいた様子を知ることができる。それは遺跡においても、益山「笠店里古墳」⁽³²⁾や羅州「潘南古墳群」などに代表される6世紀以前の地方独自文化が、このごろからはほぼ断絶し百済文化に吸収される（金洛中2009）。すなわち、百済は熊津後期から安定に向かい、聖王代になると南に残存していた地方独自勢力を統合し、領土拡張に乗り出すほど国力が伸張していたのである。

2) 仏教の様相

熊津期仏教の性格に関しては、百済仏教の特徴として一般にあげられている律蔵仏教の伝統を受け継いでいると思われる。それは『三国史記』の仏教初伝記事に、仏教請来の翌年に僧侶10人を輩出したとの内容が見られることから、当初から僧侶の出家を認める戒壇と律法が伝わったと推定している（金煥泰1985）。特に、百済で僧侶出家の際に行う受戒作法に関しては日本の『元興寺伽藍縁起兼流記資財帳』にその詳細が記されており、早い時期から律蔵学が発達し戒律中心の仏教が始まっていたとみられる。⁽³⁴⁾他にも、百済仏教における律法中心の伝統は、『弥勒仏光事跡』に聖王4年（526）印度から帰国した僧謙益が梵本律蔵を訳したとする記録や、⁽³⁵⁾『日本書紀』敏達6年条に記す威徳王24年（577）日本へ経典・仏師らと共に律師を送った記事、また同王35年（588）戒法修学に百済を訪れた善信尼らに関する記事（崇峻元年条）などの例からも窺うことができる。これらの文献記事を踏まえると、百済で律学が重視・発展していたことはおおむね認められるのである。

一方、熊津時代の仏教文化は、熊津初期からの遺跡である「公山城式瓦」や地方豪族の古墳副葬品などにも痕跡が確認されているが、百済仏教色がより鮮明になっていくのは、武寧王陵遺跡や聖王代の仏教交流記事などが浮上する熊⁽³⁶⁾

津後期からである。その背景には前に述べたように熊津期の政治と対外情勢が密接に関係している。特に、中国の南朝仏教を最も隆盛させ、自らも仏教に深く帰依した梁武帝の在世時（位502～549）が丁度、熊津時代後半の武寧王（位501～523）と聖王（位523～553）代に重なっている時代背景も大きく影響していた。この時代を伝える中国の史書『梁書』と『南史』には、百済が武寧王から聖王代にかけて行った梁との交流を見ることができる。中でも、次の記事は当時の百済仏教の様相を知る上で重要であると思われる。

「中大通六年（534）、三月甲辰、百済国遣使献方物」

『梁書』卷3、武帝条

「中大通六年、大同七年、累遣使献方物、并請涅槃等經儀毛詩博士、并工匠画師等、勅并給之」

『梁書』卷54、諸夷百済条

「大同七年（541）、是歲、宕昌蠕蠕高麗百済滑国、各遣使朝貢、百済求涅槃等經疏及匠工画師毛詩博士、並許之」

『南史』卷7、武帝条

上の内容で注目すべきところは、百済が遣使の度に諸工人と『涅槃經』を求めている点である。まず『涅槃經』は、入滅する前後の仏陀の事績を記している仏典で、とりわけ仏塔を建て舍利を安置し供養を行う舍利信仰や、仏教の理想的君主像である転輪王思想を説いていることから、梁の武帝や隋の文帝など多くの崇仏君主らに奉読された經典である。それ故、この涅槃經の要請は熊津後期における政治理念として請来された可能性が高いと考えられる。次に工匠・画師など造寺工に関しては、この頃は熊津から泗沘への遷都（538）を前後にする時期であることから、遷都計画と実行がなされる時に仏典と工匠、画師などを要請することは新都造営に密接な関連を持っていたと考えるのが妥当であろう。遷都を見据えた新都造営に伴う仏事に関しては、北魏の平城（398）と洛陽遷都（494）に伴う大仏事や、高句麗の平壤遷都（427）前の九寺院建立など、ほぼ同時代から類例を見ることができる。以上を踏まえると、熊津後期の聖王代に推進された泗沘新都の造営には南朝の技術と仏教思想が深く関わっていたことが推察できる。

4. 漢城・熊津期仏教の実態

1) 漢城期仏教の受容と展開

4世紀後半の漢城時代から始まったとする百済仏教の初伝に関しては、当時の様子を明確に現わす資料の発見こそ乏しいものの、瓦や諸史書などを考慮すると、信仰状況とは別個に仏教の存在が支配層を中心に知られていたことは確かである。ところが、百済仏教の発達が鮮明になるのは百済後期にあたる熊津時代後半から泗沘時代にかけてであり、漢城期の微々たる仏教様相に対しては伝来自体を疑問視する声もある。特に百済では、前章で検討したように早い時期から中国との外交を開始し、3世紀中葉の近肖古王代には冊封関係を結んで先進文物の輸入も問題なくできていたにもかかわらず、当時の中国に広まっていた仏教の受容には消極的であった。それには、いくつかの理由が推論されているが、何より原三国時代から受け継がれていた在来思想の影響が考えられる。中国や韓国に伝わる複数の史料に紹介されている朝鮮半島地域の古来祭祀は、百済を含む朝鮮三国で古代国家体系が整えられた以降も続けられていた。また今日、考古学調査により確認された「竹幕洞遺跡」や「月出山遺跡」などの祭祀遺跡は、百済で行われた祭祀儀礼を実証するものであり、まだ不明瞭さは残っているも、その役割と影響に関しては考慮すべき点が少なくないことを示唆する。

百済で仏教の導入が遅れる原因となった祭祀儀礼は、枕流王代の仏教公伝(384)以後も仏教普及の障害になっていたと思われる。それは『三国史記』に見えるように、長年行われ続けた祭祀儀礼は当然それに携わる集団を中心とする勢力に発展し、仏教の普及にも何らかの影響力を行使していたのではないだろうか。実際、外来から請来された仏教が在来思想の反発に会い、主流に受け入れられるまでに時間を要していた類例は、紀元前後の漢代に中国へ伝わった仏教が六朝時代になってようやく政治・文化の前面に登場することや、新羅で仏教公認をめぐる起きた「異次頓の殉教」⁽³⁷⁾、また日本でも仏教公伝の際に繰り広げられた所謂「崇仏論争」などがあり、これらの事例は仏教が受容以後にも定着するまでに少なくない抵抗を受けている様子を現している。

一方、百濟漢城期における仏教公伝後の史資料の空白には、祭祀儀礼の影響以外にも当時の主な受容層であった支配階級の仏教認識が私的で文化要素への興味にとどまっていたことが指摘できる。それは、この時代の仏教の痕跡が王宮址内の瓦や、後述する漢城末から熊津初期の古墳副葬品など、限定かつ個人的に享受する遺物に集中していることから推定できる。ただし、仏教文化が当時の支配層の間で用いられていたことは明白で、特に文献に見られる阿莘王の⁽³⁸⁾下教と蓋鹵王代の僧道琳の⁽³⁹⁾働きに加え、ほぼ同じ頃に仏教公伝が行われた高句麗の⁽⁴⁰⁾仏教関連記事を踏まえてみると、まだ盛行に至るとは言えないまでも初伝後の仏教が漢城において継続し行われていたことは確実である。すなわち百濟の仏教は、文献に初伝が見える4世紀末から漢城期の蓮華文軒丸瓦が普及する5世紀まで、支配層を中心に受け継がれていたことは確かであるが、当時の仏教認識や既存の政治理念であった祭祀儀礼などの影響により栄えることはできず、故に豊富な文化資料を残すこともできなかったと類推できるのである。

2) 熊津期仏教の意味と寺院址の問題

百濟の仏教は熊津期に下ると、以前より豊富な関連記録が韓国や中国、日本に伝わる複数の文献から見られると同時に、武寧王陵や豪族の古墳副葬品など考古資料を通じて、仏教文化を介して外交や政治にかかわってくる仏教像を実証することができる。ところが、仏教活動に最も中心的な役割を担うべき寺院址が、当時の都である熊津周辺から明確に比定できない事実は課題として残っている。このように史資料の様相とは相応しない実態への疑問、つまり公州地域で百濟伽藍が不明瞭なことに対する理解は、百濟仏教史を概観する上では勿論、その後の泗沘時代に現れる寺址を含む膨大な考古資料を考えるにおいても先決すべき問題である。そこで、この節では熊津期の仏教展開と造寺事情に関して、今までの調査結果を基に考察を行い次のようにまとめた。

①熊津初期の仏教様相

熊津初期における仏教の形は、法泉里4号墳や龍院里C地区石室墳などの出土品に見るように、特定の個人を埋葬した古墳副葬品にとどまり、その点ではまだ私的で文化要素への関心に偏る性格を維持していたと考えられる。これら

の遺跡は熊津遷都を前後にした時期に、地方豪族の間でも仏教文物が出回っていた痕跡を現していることは確かだが、古墳という個人的な空間に用いられたことに加え、当遺物が副葬品全体で占める割合からも普遍的であったとするには無理に覚える。また、これらの古墳は当時の中央政権との関連が認められていることから、遺物の普及状況を含む仏教の認知も限定的であったと捉えられる。そのような傾向は仏教初伝以来、まだ隆盛をみることのできなかった漢城仏教の様相を引き継ぐものとみられる。一方、寺院に関しては、戦乱による遷都と政治的困難に置かれていたこの頃の百濟情勢から、膨大な財力と権力を必要とする伽藍造営が行われたとは想定し難いが、とは言え、伽藍の不在が百濟仏教の断絶を意味するものではないことも確かである。それは熊津期全般にかけて流通されていた蓮華文瓦の存在や、後の武寧王と聖王代に急増する史資料の中に仏教的理解なしには成しえないものも少なくないことを考え合わせると、一般的にまでは至らなくても仏教への知識と理解ができる環境は備えていたと認められる。

以上のような熊津初期の状況を考慮すると、この時代の仏教活動には比較的規模の小さく、個人的奉仏に適していた捨宅寺院の形態が有力に推定される。王族や有力者の邸宅を改築して仏像を安置する捨宅寺院は、基本的に同時代の住居跡を維持していることから遺構の構造による区別は容易ではないとされる。それでも捨宅寺院の仏教形態は、中国や日本の史資料を通して詳細を確認することができる。例えば、日本では古代寺址である和田廃寺⁽⁴¹⁾や檜隈寺址⁽⁴²⁾などから捨宅寺院と想定される前身伽藍の存在が発見されている。また、関連研究（服部1965、王恵君1996）によると、中国仏教史でその隆盛さがよく知られる北魏洛陽の場合、本格的伽藍の建立が活発である一方、多様な階層の寄進による捨宅寺院の造営も王朝全般にかけて絶えず行われていた。特に、その傾向は伝来初期にとどまらず、むしろ戦乱や王朝の滅亡を前後とする混乱期、つまり社会的不安が広まるにつれ盛んになる特徴をみせると言う。これらは不安定な社会状況にあった熊津前期の百濟仏教においても、捨宅寺院による草堂仏教の形を類推してみる有力な手がかりを提供していると思われるのである。

②武寧王陵の造営と熊津後期仏教の意味

熊津後期の仏教に関しては、当時に本格化する遷都計画とそれに伴う泗沘経営が密接に関わる。そもそも熊津都城は63年しか存続せず、その原因をめぐっては熊津が持つ地理的不利などを理由に、早い時からの移都が支配階級を中心に意識されていた指摘もある。⁽⁴³⁾それは遷都当初から新築せず改築だけで使われていた王城公山城を含め、熊津期に都城内の土木工事がほとんど見られない『三国史記』の内容からも、遷都後の熊津内で開発や整備が低迷していたことを窺える。中でも、熊津初期の困難から安定に入り国力回復に向け多くの土木工事が行われた東成王代に注目してみると、王8年の牛頭城築城を始め23年の加林城築城に至るまで、都城以外では多くの土木工事が行われている⁽⁴⁴⁾に対し、熊津都城内では王宮の重修と臨流閣の建立以外、大胆な王都整備は行われていないことがわかる。特に同じ頃、泗沘加林城の築造や泗沘原への行幸がたびたび見られることを合わせて考えると、泗沘地域への関心がすでに熊津期中葉からあったことを窺うことができる。

一方、仏教要素を多く含んでいることで有名な武寧王陵の場合、一見、先述した熊津初期の私的な仏教特性が思われがちだが、詳細を見ると築造に用いられた塼を始め仏教色を呈する品々が数多く調達されていることや、その中には宝珠形壁龕と木枕の図像のように仏教的理解が前提されていることが濃厚な遺物も少なくない。これらの特徴は前例を見ないもので、この遺跡が有する仏教的要素がそれまでと一線を画していることは明白である。また、同じ塼築墳である6号墳と共に、武寧王陵が宋山里古墳群の中で持っている特別な意味合い⁽⁴⁷⁾を踏まえてみると、むしろ、それまで貧弱であった仏教を一層広めようとする積極性すら受け取れる。さらに、『梁書』や『南史』など中国の史書が記すように、新たな思想と先進技術の導入という目的を鮮明にする百済の仏教請来が同じ頃に続いていることは、武寧王陵にあらわれる仏教への積極さがどこにあったかを明確にさせる。すなわち、熊津後期の仏教復興には新たな政治思想と新都造営に密接な関連を持っており、中でも武寧王陵の造営は後の泗沘都城で栄える王室寺院造営を先立つ始発点であったのである。

このように熊津後期に現れる仏教の隆盛は、新たな政治思想を含む新都造営に必要な文物導入の一環でもあった。それは伽藍が不在である熊津地域の現状

とも関連付けられる。まず、扶餘井洞里瓦窯址の発掘調査で明らかになった宋山里6号墳と武寧王陵への蓮華文磚の受給関係⁽⁴⁸⁾からは、すでに武寧王陵造営の頃に王室関連施設が泗沘近郊に置かれていたことを表わしている。また、ほぼ同時期に始まる大通寺式瓦が龍井里寺址を始め、東南里寺址、軍守里寺址、陵山里寺址など扶餘地域で確認された多くの寺址から出土することは、熊津期仏教の技術的側面が泗沘地域に移入されたことを意味する。以上を踏まえると、百済では武寧王陵造営の頃である熊津後期になると、新都である泗沘を意識した経営が進められ造寺を含むそれまでの建築技術がそのまま泗沘造営に用いられ、その際、寺院の建立が行われていた可能性も十分に類推される。すると今日、扶餘地域で確認される初期の伽藍には、遷都を見据えていた熊津後期からすでに造営が定められた寺院の存在も想定してみることができるのである。

おわりに

本研究は百済仏教史の中で、漢城から熊津期までを中心に関連史資料の検討と考察を行ったもので、特に今回の調査では、史資料事情を勘案し現存資料だけでなく先行研究なども積極的に活用しながら分析を進めた。それによる結果を要約すると以下のようなものである。まず4世紀後半、中国東晋からの公伝を始原とする漢城期仏教は、蓮華文瓦の出現や当時の対外交流と周辺情勢を記した文献内容などを踏まえると、百済に仏教が知られていたことは認められる。ただし、漢城期の仏教が発展を見られなかったことも確かで、その原因には原三国時代から受け継がれていた祭祀儀礼など在家思想の影響と、仏教の主な受容層であった支配階級の認識が個人的かつ文化的興味にとどまっていたことがあげられる。

次に、続く熊津期仏教の展開様相に関しては、遷都直後の政治・社会的不安定などもあり、熊津初期にはまだ一般的にまで普及することができなかったが、それでも蓮華文瓦の流通や直後の熊津後期に急増する史資料状況から考えると、仏教が跡絶えることはなかったと見られる。特に、当時の社会状況や近隣地域の事例などを鑑みると捨宅寺院による草堂仏教の形を推定することができる。一方、豊富な史資料の確認により隆盛が窺える熊津後期の仏教には、本格化す

る新都造営に伴う新たな政治思想と先進技術の導入が密接に関わっており、その始発を武寧王陵の造営から求めることができる。さらに、遷都地である泗泚造営には熊津期の建築技術がそのまま用いられていることから、今日、扶餘地域で確認される泗泚初期の伽藍には熊津後期から造営が定められた寺院の存在も十分に想定されるのである。

以上、百済の漢城期と熊津期の仏教情況に関して調べてみたが、今後は百済仏教におけるより多くの考古学的成果を期待する一方、自分の研究対象においても時代幅を百済後期である泗泚時代にまで広げることで、百済仏教の全般にわたる変遷様相を考察すると共に、一層、緊密な交流が見られる中国や古代日本の仏教との比較分析を通じて、当時の東アジア仏教の意味をより深化していくことを課題としてあげておきたいと思うのである。

註

- (1) 『三国史記』巻24「百済本記」枕流王元年9月～2年条、『三国遺事』巻3「興法」難陀闍済条
- (2) 「(前略)百済觀勒僧、表上以言、夫仏法、自西国至干漢經三百歳、乃傳之至於百済国、而僅一百年矣。然我王聞日本天皇之賢哲、而貢上佛像及内典、未滿百歳。故當今時、以僧尼未習法律、輒犯惡逆。是以、諸僧尼惶懼、以不知所如。仰願、其除惡逆者以外僧尼、悉赦而勿罪。是大功德也。」
『日本書紀』推古32年(624)10月条
- (3) 『三国史記』巻25「百済本記」阿莘王元年2月条
- (4) 本書は現存せず、李朝末期の仏教学者である李能和が著した『朝鮮佛教通史』にそれを引用した内容の一部が伝わる
- (5) 『晋書』巻9太宗簡文帝条、『三国史記』巻24「百済本記」近肖古王27年条から同28年条
- (6) 近肖古王代に起った雉壤城戦闘は近肖古王24年条に記録があるが、太子と莫古解とのやり取りは近仇首王条にその詳細が見える
- (7) 韓国に現存する最古の史書である『三国史記』は、朝鮮三国時代から統一新羅までを研究する上で最も重要な史料であるが、その史料批判を巡っては依拠史料に現存しないものが多く、他の史資料との衝突も少なくないことから、信頼性が疑問視される個所も実在する。
- (8) 『晋書』巻3武帝条と巻97四夷東夷馬韓条によると、馬韓の遣使に関する初記録が咸寧3年(277)に見える以後、元康元年(291)までに約10回以上の遣使記事が記されている。

- (9) 漢城時代の対中交流記事は、『晋書』に咸安2年(372)から太元11年(386)まで5か所、『宋書』に義熙12年(416)から泰始7年(471)まで12か所が見え、それ以外にも『梁書』54諸夷百済条、『魏書』54諸夷百済条に関連記事を見ることができる
- (10) 高句麗の律令は仏教公伝翌年である小獸林王3年(373)に頒布され、一方、新羅では律令制定から7年後の法興王14年(527)に仏教が公伝されたが、新羅の仏教は5世紀初めの訥祗王頃に初伝が見え、528年梁への遣使を機に広く信仰されることから、両国とも律令制定において中国から請来された仏教の関連が認められている
- (11) 「咸安二年(372)春正月辛丑、百済・林邑王、各遣使貢方物。六月、遣使拜百済王余句、為鎮東將軍領樂浪太守」 『晋書』巻9
- (12) 「二十七年(372)春正月、遣使入晋朝貢」 『三国史記』巻24
- (13) 『扶安竹幕洞祭祀遺跡』国立全州博物館、1994
- (14) 『三国史記』巻32「雜志」1祭祀条、小祀地の一つ月奈岳を指す
- (15) 『靈巖月出山祭祀遺跡』木浦大学博物館、1996
- (16) 松原三郎『中国仏教彫刻史論』吉川弘文館、1995
- (17) 水野清一「大夏勝光二年金銅佛坐像」『佛教藝術』21、毎日新聞社、1954
- (18) 黄壽永「扶餘窺巖面出土百済仏菩薩像」『美術資料』8、国立中央博物館、1963
- (19) 『旧唐書』「列傳」第149東夷条「其所居必依山谷、皆以茅草葺舍、唯佛寺神廟乃王宮官府及用瓦」
- (20) 武寧王陵の蓮華文磚に対して敵基杓(2010)は、六葉蓮華文磚を文様が隣接するⅠ類と文様の間が網文によって離れるⅡ類に分け、2個1式の八葉蓮華文磚は周りを点文に飾るⅢ類と忍冬文が施されたⅣ類に分類した。一方発見当時は、使われた向きによって縦方向のもの(敵基杓Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ)と横に敷かれたもの(敵基杓Ⅱ)に注目されていた。
- (21) 『法泉里Ⅰ』国立中央博物館、2000
- (22) 『龍院里遺跡-C地区発掘調査報告』ソウル大学校博物館、2001
- (23) 『三国遺事』巻3「興法」3原宗興法厭罰減身条
- (24) 『東国輿地勝覽』巻17「公州牧」、『公山誌』巻2「寺刹」
- (25) 石田茂作「扶餘東南里廃寺址発掘調査」『昭和十三年古跡調査報告』
- (26) 洪再善「百済の伽藍—泗沘都城を中心に」『百済伽藍にこめられた仏教文化』、2009
- (27) 『三国史記』巻27「百済本記」法王2年条、(同書)武王35年条、『三国遺事』巻3「興法」3法王禁殺条
- (28) 李炳鎬「扶餘定林寺址出土塑彫像の製作時期と系統」『美術資料』74、国立中央博物館、2006

- (29) 石田茂作「扶餘軍守里廃寺址発掘調査」『昭和十一年古跡調査報告』
- (30) 『北魏洛陽永寧寺1979～1994考古発掘報告』中国社会科学院考古研究所、1996
- (31) 『宗書』巻97「列伝」57夷蛮・倭国条
- (32) 『日本書紀』継体6年4月～12月条
- (33) 『益山笠店里百済古墳群』圓光大学校馬韓百済文化研究所、2001
- (34) 『元興寺伽藍縁起』の内容に関しては、一部、後の編者による潤色が指摘されているが、日本最初の尼僧である善信尼ら三尼が百済に赴き受戒と戒律を学んだ行跡は『書紀』ともほぼ一致し事実として認められている。それ故、6世紀頃の百済仏教にはすでに律蔵仏教が確立していたことも確かであると考えられる
- (35) 注(4)参照、李能和の『朝鮮佛教通史』に引用記事が載せられている
- (36) 聖王代の仏教請来と伝来に関しては『三国史記』を始め、『日本書紀』や『梁書』など多くの史書を通じてその詳細を確認することができる
- (37) 新羅、法興王14年(527)に仏教の公認をめぐり多くの臣下が反対する中、王の従姪であった異次頓が仏法の奉行を主張し殉教した事件
- (38) 注(3)参照
- (39) 『三国史記』巻25「百済本記」蓋鹵王21年条に、高句麗の僧道琳が長寿王の間者として百済に入り、蓋鹵王と親密になった後に高句麗の漢城侵略を手助けする内容が記されている。
- (40) 文献に見られる百済漢城期頃、高句麗であった仏教関連出来事は以下のようである。(記事は一部抜粋)
- 「小獸林王2年(372)6月、秦王苻堅、遣使及浮屠順道、送仏像經文」
『三国史記』18他『三国遺事』3
- 「同4年(374)4月、僧阿道来」
『三国史記』18他『三国遺事』3
- 「同5年2月、始創省門寺、以置順道、又創伊弗蘭寺、以置阿道」
『三国史記』18他『三国遺事』3
- 「故国壤王9年(392)3月、下教崇信仏法求福」
『三国史記』18
- 「廣開土王2年(393)、創九寺於平壤」
『三国史記』18
- 「(同6年)積曇始、晋孝武大元之末、齎經律数十部、往遼東宣化」
『梁高僧伝』10他『三国遺事』3
- 「文咨王7年(498)7月、創金剛寺」
『三国史記』19
- (41) 小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』100、考古学研究会、1979
- (42) 「飛鳥・藤原京蹟等の調査概要」『奈良文化財研究所紀要』、奈良文化財研究所、2010
- (43) (兪元載1995)によると、熊津地域は車嶺山脈と錦江に取り囲まれる地形か

ら軍事的には要衝であったが、川の氾濫が多く農耕地も不足しており首都としてはあまり適してなかったとする

- (44) 『三国史記』巻26「百濟本記」東成王条に見える宮城以外の土木工事は以下のものが記されている。牛頭城築城（王8年7月）、沙峴城と耳山城築城（王12年7月）、熊津橋架設（王20年）、沙井城築城（王20年7月）、加林城築城（王23年8月）
- (45) 注(44)の本-東成王8年7月、同20年、同22年条
- (46) 注(44)の本-12年9月、23年8月、同年10月、同年11月条
- (47) これまで武寧王陵を含む計9基に対する発掘調査が行われた公州宋山里古墳群では、塼築である6号墳と武寧王陵以外、ほとんどが横穴式石室墳であることが確認された。両墓制の関係に対しては、後者が当時の支配層で流行した一般的墓制で、塼築墓は中国の影響で一時的に造られたものとしている。
- (48) 尹龍熙「百濟瓦塼文化の形成と展開過程」『百濟瓦塼』、2010

＜主要参考文献および図版出典＞

- ・王恵君「北魏洛陽を中心とした捨宅為寺に関する考察」『日本建築学会計画系論文集』日本建築学会、1996
- ・鎌田茂雄『新中国仏教史』大東出版社、2001
- ・亀田修一「百濟の瓦」「熊津・泗沘時代の瓦」『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館、2006
- ・軽部慈恩『百濟美術』寶雲舎、1946
- ・窪添慶文「南北朝時期の国際関係と仏教」『古代アジアの仏教と王権-王興寺から飛鳥寺へ』勉誠出版、2010
- ・清水昭博『古代日韓造瓦技術の交流史』清文堂、2012
- ・末松保和「新羅仏教伝来伝説考」『新羅史の諸問題』東洋文庫、1954
- ・外村 中「中国の同泰寺の園池について」『ランドスケープ研究』62、日本造園学会、1999
- ・田村圓澄『百濟文化と飛鳥文化』吉川弘文館、1978
- ・服部克彦「北魏洛陽の寺院と仏塔」『印度学仏教学研究』35、日本印度学仏教学会、1987
- ・門田誠一「魏晉南北朝期の中国系遺物と百濟」『東アジアにおける宗教文化の総合的研究』佛教大学アジア宗教文化情報研究所、2008
- ・権五榮『古代東アジア文明交流史の光、武寧王陵』トルベゲ、2005
- ・吉基泰「漢城百濟の対外交流と仏教」『百濟研究』55、忠南大学校百濟研究所、2012
- ・金洛中『梁山江流域の古墳研究』ソウル大学博士学位論文、2009
- ・金煥泰『百濟仏教思想研究』東国大学校出版部、1985

- ・金元龍「羶島出土金銅仏坐像」『歴史教育』5、歴史教育研究会、1961
- ・盧重国「百済政治史研究」ソウル大学校博士学位論文、1986
- ・朴承範「漢城時代百済の国家祭祀」『先史と古代』19、韓国古代学会、2004
- ・蘇鉉淑「梁武帝と同泰寺」『佛教学報』54、東国大学校仏教文化研究所、2010
- ・嚴基杓「武寧王陵の仏教的要素と熊津時期百済仏教の推移」『文化史学』34、韓國文化史学会、2010
- ・兪元載「熊津時代の泗沘経営」『百済文化』24、公州大学校百済文化研究所、1995
- ・李基白「三国時代仏教受容の實際」『百済研究』29、忠南大学校百済研究所、1999
- ・李南夷「百済大通寺址とその出土遺物」『湖西考古学』6・7、湖西考古学会、2002
- ・鄭東俊「東アジア古代官制上の22部司」『史林』29、首善史学会、2008
- ・鄭治泳「百済漢城の瓦當と瓦葺景観」『湖西考古学』23、湖西考古学会、2010
- ・趙景徹「百済漢城時代仏教受容と政治勢力の變化」『韓国思想史学』18、韓国思想史学会、2002
- ・趙景徹「百済仏教の中国影響に対する批判的検討」『韓国思想史学』36、韓国思想史学会、2010
- ・趙源昌「公州地域寺址研究」『百済文化』28、公州大学校百済文化研究所、1999
- ・『武寧王陵 新報告書』国立公州博物館、2009
- ・『百済伽藍にこめられた仏教文化』国立扶餘博物館、2009
- ・『百済瓦塼』国立扶餘博物館、2010
- ・『百済廃寺址—學術調査報告書』国立扶餘文化財研究所、2008
- ・『漢城から熊津へ』国立公州博物館、2006
- ・『韓・中・日、古代寺址比較研究-木塔址』国立扶餘文化財研究所、2009

※和文はア、イ、ウ、エ、オ順、ハングル文は가、나、다 順

※紙数の都合上、各遺跡の調査報告書は省略



【図1】蘇島出土金銅仏坐像



【図3】熊津期の蓮華文瓦
(公山城式①、大通寺式⑦)



【図4】青銅蓋
(法泉里4号墳)



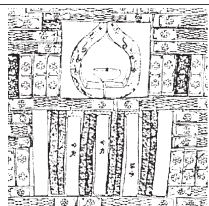
【図5】青磁蓮弁文碗
(龍院里C地区)



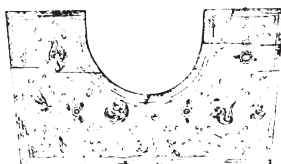
蓮華文裝飾磚



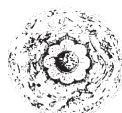
金製冠飾(王妃)



宝珠形壁龕



木枕(王妃)



銅托銀蓋



銅 蓋

【図2】武寧王陵の仏教色遺物

表 1 主な百濟寺址

遺跡名	所在地	創建時期	立 地	伽藍配置
龍井里寺址	忠清南道 扶餘郡龍井里	6 世紀初	<ul style="list-style-type: none"> ・都城外 ・北に青馬山城、南の平地に小川と村 	中門-木塔-金堂-講堂（南向）
東南里寺址	忠清南道 扶餘郡東南里	6 世紀前半	<ul style="list-style-type: none"> ・都城内・北に丘陵、南は平野 	中門-金堂-講堂（南向、無塔式） ・金堂前に水槽跡 ・講堂の左右にある建物址は軍守里寺址を類例に鐘楼・経蔵と推測（朝鮮古跡研究会 S.13）
軍守里寺址	忠清南道 扶餘郡軍守里	6 世紀中葉	<ul style="list-style-type: none"> ・都城内 ・東の宮南池（泗沘期別宮跡）に繋がる ・当初、南に旺浦川が流れる独立寺院が宮殿造営に伴って宮内寺になったと推定 	中門-木塔-金堂-講堂（南向） ・塔と金堂を中心に中門、講堂までの距離がほぼ一致 ・講堂の左右に鐘楼・経蔵推定址（朝鮮古跡研究会 S.11）
陵山里寺址	忠清南道 扶餘郡陵山里	威徳王13 (567)	<ul style="list-style-type: none"> ・都城外 ・南に小川、西の扶餘羅城と東の陵山里古墳群の間 ・谷間立地から全域に排水施設 	中門-木塔-金堂-講堂（南向） ・東西の回廊と講堂の左右に鐘楼・経蔵・工房推定址
王興寺址	忠清南道 扶餘郡窺岩面	威徳王23 (577)	<ul style="list-style-type: none"> ・都城外 ・蔚城山の南麓・寺の前に百馬江が流れ、王が船に乗って行香したとする記録に一致 	木塔-金堂-講堂（南向） ・講堂の左右と東西の回廊にそれぞれ付属建物址 ・南の川に向け長い石垣による進入路 ・寺域東側に瓦窯址
定林寺址	忠清南道 扶餘郡東南里	6 世紀後半 / 7 世紀初 (6C 前半も)	<ul style="list-style-type: none"> ・都城内 ・泗沘市街の中心、宮城につながる直線道路も推定 ・東北に錦城山西麓、南の小川を蓮池に改築 	中門-石塔-金堂-講堂（南向） ・中門の外に南門址 ・木塔様式の五重石塔残存（石塔の始原） ・講堂左右に鐘楼・経蔵推定址
扶蘇山寺址	忠清南道 扶餘郡双北里	7 世紀前半	<ul style="list-style-type: none"> ・都城内 ・扶蘇山城内の西南麓、王宮址の北西に隣接 	中門-木塔-金堂（南向、無講堂）

基壇構造				備 考
堂・塔	大きさ(m)	内部	外装	
木塔	前幅 18.50 側 14.60	掘塙版築	二重基壇 (推定)	・金堂址は再建痕跡がある ・出土遺物に百済初期瓦、高句麗系蓮華文瓦
金堂	前幅 30.75 側 20.19	掘塙版築	石材残存	
金堂	前幅 30.3 側 21.2	掘塙版築	雨落用板石・玉石残存	・1938年、石田茂作の調査による ・1993年調査では金堂址、講堂基壇一部、水槽のみ確認 ・塔のない捨宅寺と推定
講堂	前幅 52.7 側 21.2	掘塙版築	玉石残存 (金堂同様)	
木塔	一辺 14.14	盛土版築	埵積基壇	・1935年・36年、石田茂作らの調査2005年から再調査・整備中 ・木塔から地下式心礎と心礎周辺に荘厳具埋納を確認
金堂	前幅 27.27 側 20	盛土版築	瓦積基壇 (合掌式)	
講堂	前幅 45 側 18	盛土版築	瓦積基壇	
木塔	一辺 11.7	掘塙版築	二重壇上積	・「昌王銘舍利龕」出土により創建年比定 ・木塔から地下式心礎と礎石を利用しない舍利安置確認 ・陵山里王陵郡に関連する王室祈願寺と推定
金堂	前幅 21.62 側 16.16	掘塙版築	二重壇上積	
講堂	前幅 37.40 側 18.00	掘塙版築	瓦積基壇	
木塔	一辺 14	盛土版築	石積基壇	・2007年出土の舍利容器銘文により創建年比定 ・半地下式心礎の上、新たな版築土層を詰め心柱を立てる ・礎石上面に心礎舍利孔を設け舍利安置 ・現在、調査・整備が続く
金堂	前幅 22.7 側 16.6	盛土版築	石積基壇 (推定)	
回廊と付属建物址から瓦積基壇が確認				
石塔	塔高 8.33 塔辺 3.75	版築確認	平坦地	・高麗期の再建により残存百済基壇は限定的 ・三尊仏など多数の百済様式塑像出土、中国永寧寺遺物との類似が指摘 ・当初は木塔が存在し、創建年を6世紀前半と見る意見もある
金堂	18.75×13.80 (建物)	盛土版築	二重基壇	
講堂	前幅 39.1 側 16.3	盛土版築	瓦積基壇	
木塔	一辺 約8.0	自然岩盤層利用	乱石積 (推定)	・時期が把握できる唯一の山中伽藍 ・立地・無講堂などから王室私的寺院の性格と推定
金堂	前幅 14.2 側 11.2	自然岩盤層利用	二重基壇 (推定)	